

令和元年度夏季特別展

家事・家電・家庭のうつりかわり—「主婦」の近代—

家庭での炊事洗濯などの「家事」といわれるものは、明治時代以降、「女性によって担当されるもの」という考えが主流となり、「主婦」という言葉も「家事を担当する女性」を指してきました。

従来、家事は重労働であり、そのため、洗濯機や掃除機など、さまざまな家庭用電気機械器具(家庭用電気製品、家電)が考案され、改良されてきました。そうした家電は「主婦」をターゲットとして雑誌などで盛んに宣伝されています。また、そうした雑誌では、期待される「主婦」像や家庭のあり方も語られてきました。

そのような女性向け雑誌や家電などの生活用品を通して、明治から平成にかけての生活の様子や家族のわたちの変遷を紹介します。

はじめに 「主婦」と家事とは

「主婦」という言葉について、今回の展示では近代においてどのような形で使われてきたかを紹介しています。言葉の定義もしくは託された意味合いは時代によって異なり、現在でも少しずつ変化しています。この語自体の要不要を問う向きもありますが、このたびの展示では「主婦」という言葉の意味の変遷、変化などを含めて暮らしの変遷を紹介します。これを示すことで、女性や家庭などの今後のより良いあり方を考える端緒となればと考えています。

また、家事とは、人びとが生きていく上で必要なもの、つまり、家庭生活を支える欠かせない仕事、作業を指します。時代によっても多少の変化があり、一概に言えない部分はありますが、家庭の中で処理されるべきととらえられている物事だと考えられます。具体的には、炊事、洗濯、掃除、裁縫、衣食住に関わる物品(生活用品)の購入、家計の管理、育児(子供のしつけや教育を含む)、病人や老人の介護などです。

これらの家事は誰によって担われてきたのかをたどると、家事の内容と担い手は時代によって変化してい

ることがわかります。

1. 「主婦」以前の事

家事には様々な仕事があり、それに合わせた道具があります。時代によって姿が変わってきたものもあれば、変わらないものもみられます。

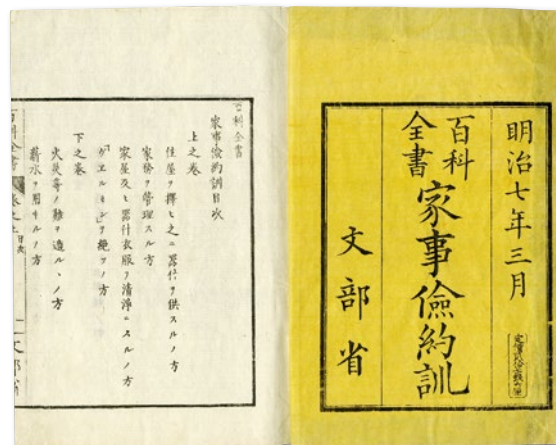
展示では、はじめに明治時代以前から使われてきた暮らしの道具を紹介します。当時から使われていたものが昭和に入って、戦後も使われ、場合によっては令和を迎えた現在でも使われているものも多くあります。

そうした道具類を紹介するとともに、近代以前の女性への考え方や、男女のたしなみと考えられていることを紹介していきます。

2. 「主婦」の誕生 ～明治時代後半から戦前まで

元々、江戸時代にも「主婦」という用語は使われ、主に家長である男性を指す「主人」に対して、その妻を指していたようです。

家政学関係の書籍で、明治に入って初の家政の専門



永田健助 訳『百科全書百科全書家事儉約訓』上 明治7年(1874)

書とされる『百科全書家事儉約訓』(明治7年(1874))で「家務ヲ管理スル方」と題する章の中に「主婦」という言葉が使われています。そして、家計管理が家事の中でも「最モ緊要」と記されています。こうして「主婦」という言葉が使われ始め、大正時代以降に発行され始めた女性向け雑誌でも広く使われるようになりました。

3. 戦後と高度経済成長と主婦 ～戦後から高度経済成長期まで

家事を助けるための家庭用電気機械器具(家庭用電気製品、家電)は白熱電球の発明(1878～1879)が最初とされ、その後、扇風機などがアメリカやヨーロッパで発明されました。ほどなく日本へも輸入され、明治時代に普及し始めました。福井で電力が供給されたのは明治32年(1899)で、当初は600の電灯が灯ったとされています。

その後、大正に入り生活改善運動が始まり、「合理的な生活」が提案、推進されていきました。戦後にも新生活運動となって継続され、特に経費節減や衛生環境改善の面での影響は大きく、こうした動きから、家の中の様子は近代以前とは少しずつ変わっていきました。

高度経済成長と電力供給体制の整備を背景に、昭和40年代には家電が急速に普及していきます。電気洗濯機、電気冷蔵庫、電気掃除機の「三種の神器」や「新三種の神器」とよばれる家電も登場し、人びとの生活の利便性が向上していきました。

当時、福井県内では、明治時代から始まった繊維産業が盛んでした。繊維産業の工場、福井ではハタヤ(機屋)とよばれる工場で働くのは女性でした。

中学卒業後すぐの女性たちが集団就職で福井へやってきただけでなく、福井の人びと、特に家庭の主婦を含む女性達も多く、それが現在の共稼ぎに繋がっているとされています。

4. これまでとこれから

現在に至るまで家事に関わる家電、生活家電といわれるものを基本としながら、映像や音響などの趣味や娯楽に関わるものを含め様々な家電も生まれてきました。そして、現在ではパーソナルコンピュータ(パソコン)や携帯電話、スマートフォンを含む情報機器も家電の一部となりました。そうして、洗濯機などの生活家電も、より高度な技術によって改良され、通信や人工知能(AI)によって制御されるようになってきました。

そうした家電の改良に伴って、かつて重労働であった家事にも誰もが出来るような部分も増えてきています。ボタン一つで指定された作業ができることも珍しくありません。

「主婦」という言葉は女性を指すことから、家事を担当する男性に対しては「主夫」という言葉も使用されることも出てきました。これは女性が家庭の外へ出て稼ぎ、男性が家事を担当している家庭もあるなど、

家庭のありようが多様化しています。

展示を通して、これまでの家事やそれに関わる人々のあり方を振り返り、今後の家庭や家族の形、どのように誰が家事を行なうかなどを考え、みなさまにとっての幸せな形について今一度考える機会になればと思います。

(川波久志)



チラシ「東芝家庭電気器具」

特別展 家事・家電・家庭のうつりかわり —「主婦」の近代—

開催期間：7月20日(土)～9月1日(日) 会期中休館日なし

観覧料：一般400円、大学・高校生300円、小中学生200円、70歳以上の方200円 ※20名以上の団体は2割引

『観光福井』 創刊号

[法 量] 25.5×18.2(cm)

[時 代] 昭和22年(1947)

今回御紹介するのは、福井県観光連盟によって発行された雑誌『観光福井』の創刊号です。この号は、昭和22年(1947)3月1日に発行されました。

福井県観光連盟は、観光地の開発・整備や観光に関する調査・研究などを行い、県民生活の明朗化や保健の向上につなげることを目的とした団体で、昭和21年の9月に創立されました。創立の際の宣言は、観光事業の健全な発展によって、国家の発展に尽くすと謳っています。

当時の福井県観光連盟の、観光にかける思いがうかがえるのが、「巻頭言」の次の一節です。

窮乏混沌の今日閑文字に似たる観光問題を議するの時に非ずとする言があるかも知れないが筆者の見解を以てすれば、食糧その他山積する難問題を解決するの鍵が観光に包含され、観光をのぞいて繁栄の道なしと迄確信してゐるのである。

つまり、敗戦後の混乱で生活がどうなるかも分からないのに観光なんかを議論している場合か、という批判もあるかもしれないが、観光はそうした問題を解決する唯一の手段なのだと言っているのです。

観光が生活の問題を解決する手段になるとはどういうことでしょうか。副会長の山本友太郎は、この雑誌に掲載されている「福井県観光連盟結成に関して」という文章の中で、次のように述べています。

例へば今一刻を争ふ食糧に致しましても、生活必需(需)物資に致しましても「総て」之を海外に仰がねばならない状況でありますが将来此の国際収支の均衡を何より求むるかは充分考慮しなければならぬ問題であります。之に対しまして産業の復興、見返物資の生産等の増強を計らねばならない事は勿論のことですが、幸ひ我国には、豊富なる天恵の風景資源があるのでありまして、之を最大限に活用致しまして戦前一億数千万円に上りました観光収入の増加を図ると致しますならば、観光の問題は此の点からも重大なる問題となるのであります。更に又広く外客を誘致いたしまして、平和日本の真の姿、自然と歴史の中に育ぐ(く)まれだ真の日本文化、美しき人情と質実なる風俗等を紹介すると共に、一面戦争により失はれました日本人の心に、再び明朗さと潤達さを取戻し、失意より立上る逞しき意欲と明日への希望と

を与ふる為には観光事業は又与つて大いに力あるものである事は謂ふ迄も無い事であります。

ここでは、観光産業を振興して外貨を獲得することで食糧や生活物資を輸入するための見返りにすることや、観光を通じて外国人に日本文化や日本人の国民性についての理解を深めてもらうことの必要性が挙げられています。また、日本人の心に明るさを取り戻し、復興へと立ち上がる意欲と希望を与える必要性も述べられています。そして、観光は、こうした問題を解決するために大きな力を持っているとされています。

他の人々の文章でも、観光に対して同じような意義づけがなされています。そのいずれからでも、敗戦後の復興の中で、いかに観光という産業を振興して、地域や国家を立て直していくのか、という緊張感が溢れています。

現在、新幹線の敦賀までの延伸が予定され、中部縦貫自動車道も整備されています。これらによって、福井県へのアクセスが向上することが期待されています。そうした中で、さまざまな観光振興が進められていくと予想されます。是非のいずれの立場に立つにせよ、われわれ一人ひとりが、「観光」というものとのように向き合っていくかを考える時が来ているのではないのでしょうか。『観光福井』に見られる、敗戦直後の人々の観光との向き合い方は、観光について考える上で、重要な材料となります。

なお、『観光福井』は、現在のところ創刊号しか確認されていません。2巻以降の存在を御存じの方や、当時の観光に関連する資料をお持ちの方がいらっしゃいましたら、当館までお知らせいただければ幸いです。

(橋本紘希)



『観光福井』創刊号 昭和22年(1947)

今上皇帝御即位之図(橘家文書のうち)

1. この図について

御所の紫宸殿(ししんでん/しいいでん)における即位礼の様子を大画面に表したものです。「今上皇帝」とは光格天皇を指します。

紫宸殿内の高御座を画面の上部中央に描きます。新天皇の姿は描かれていませんが、6人の女孺(よじゅ/めのわらわ)が翳をかざしていることから高御座への出御を示しています。なお、帳の隙間が朱色に塗られているのは天皇の礼服である冕服が赤色のため、天皇の姿を描かずに中にいることを暗示しているとも考えられます。紫宸殿の前に広がる南庭(なんてい/だんてい)には朝廷の正式衣裳である中国風の礼服の参列者が所定の位置に着き、墨書でそれぞれの役職、姓名も記載されています。また、儀式進行役の「内弁」(大臣クラスが努める)は「宣命」の事前確認等で忙しく移動し、さらに束帯から中国風の礼服に着替えて式に臨む姿まで克明に描かれています。向かって右下の安永9年(1780)の紀年銘から光格天皇の即位礼であることがわかります。

数枚の紙を継ぎ合わせ大画面を構成し、建物や人物等に丁寧に彩色を施しています。本来折り畳んで収納されていたようですが、現在は裏打ちされ掛けられるように改められています。

2. 即位之図の特色

古代以来、朝廷儀礼は先例が重視され、法令、日記、文書、図鑑等により、さまざまな形で式次第や用具が伝えられました。中世には多くの朝廷儀が途絶えましたが、江戸時代になると古記録から朝廷儀礼が整備・復興されました。一代限りの即位礼は、朝廷儀礼の最たるものとしてさまざまに記録されました。特に全体を見渡せる俯瞰図が多く作られ、木版刷りによって庶民でも即位礼の様子を知ることができました。

本図の特色は、非常に大きな画面に即位礼全体が詳細に描かれ、しかも内容の信憑性が高いと考えられることです。例えば本来高御座横に座す摂政が新天皇が幼い時に限って高御座に入るため座具のみ描かれていること、図内に記された公卿の名前や葉を落

としている左近の桜も即位の時期に合致していること、人物のみならずと幡等器物の配置も他の天皇の即位図と比較しても正確なことです。彩色も衣裳や儀式器物の色見本(記録)の意味があったと考えられます。

また、図中に何度も描かれている人物は異時同図法により儀式中の仕事や立ち位置の変化が一目でわかるようになっています。さらに廷臣や女官等の仕事や立ち位置を理解しやすくするため紫宸殿内部の屋根や壁を取り払い、俯瞰のまま柱位置を建築平面図のように「●」で示しています。

さらに図外の向かって右下には年紀と共に摂政・左大臣以下朝廷および幕府側の関係も含め職・名前が記されており、幕府(京都所司代)と朝廷との実質的な関係を知ることできます。

以上から風景画のような美術作品ではなく、実務的



今上皇帝御即位之図

な絵図面として即位礼前の事前確認若しくは事後の精密な記録資料として制作されたと考えられます。また、本図は光格天皇即位時に摂政であった九条家から福井城下の豪商橘家に譲られたもので、伝来の確かさ、本図の大きさ、内容の詳細さも含め江戸時代の朝廷儀礼に関する貴重な資料といえます。

3. 即位之図を伝える橘家について

本図が伝来した橘家は、福井市西木田に本拠を置き、中世、近世を通じて北庄・福井城下屈指の商家、医師として知られた旧家です。天明2年(1782)、奈良時代の橘諸兄の子孫を称する橘家の由緒の件で、五摂家の1つである九条家(摂政尚実)より京都へ招かれました。九条家での調査の結果、橘諸兄の末裔と認められ、その関係で「今上天帝御即位之図」を拝領したと

いいます。九条家と橘家の間での本図に関わる伝来事情については今後の研究課題ですが、同家文書から本図の出所が確認される点も重要です。

なお、橘家に伝来した中世以来の文書群は「橘家文書」として当館に寄贈され、平成30年には県の有形文化財に指定されました。

4. 光格天皇については

光格天皇は安永8年(1779)、9歳で即位して以来、天皇在位39年、さらに文化14年(1817)に息子である仁孝天皇に譲位した後の24年間は上皇として、天保11年(1840)に70歳で亡くなるまで長きに渡り朝廷に君臨しました。その間、翳りの見え始めた江戸幕府に対し、朝廷の地位向上に挑み続けました。新嘗祭(いになめさい※)をはじめとした中世以来途絶していた

朝廷主催の神事や儀礼の復活、焼失した御所の平安時代のすがたへの復古的な再建、さらに自身父である閑院宮典仁親王への太上天皇号宣下の画策(尊号事件)等、多くの事蹟が知られています。近年では幕末から維新へと至る近代天皇制への基礎を築いた人物として脚光を浴びています。

※その年に収穫された新米を神と天皇が共食するという神事のこと。

(河村健史)



福井地震前のカラー写真 (朝日新聞社提供)

はじめに

ジェームズ・原谷氏撮影・旧蔵写真群

平成7年(1995)6月28日、朝日新聞朝刊に鮮やかなカラー写真が掲載されました。昭和23年(1948)6月28日に発生した福井地震の被災状況の写真で、当時、舞鶴市に駐屯していた米国軍人、ジェームズ・原谷氏が撮影したものです。戦後間もないこの時期、カラー写真はたいへん貴重なものであり、福井地震の写真も、それまで知られていたものは白黒写真でした。そのため、これらのカラー写真は、被災状況を鮮やかに、かつ身に迫る形で伝えるものとして注目され、当館でも平成13年の特別展図録『福井空襲・福井震災』に、全点(17点)を掲載しています。

そして震災から70年を迎えた昨年、改めて確認する機会があり、原谷氏旧蔵のカラー写真は全部で40点残されていることがわかりました。前述の被災状況

の写真17点以外に福井に関連するカラー写真が7点、そのほかは京都府舞鶴市の軍港や市街地、東京都心などの写真でした。ここでは、福井に関連する7点について紹介します。

福井市街地のカラー写真 (朝日新聞社提供)

7点のカラー写真は、そのすべてが福井の中心市街地(現 福井市)を撮影した写真です。木造の店舗や家屋が軒を連ね、福井県庁(福井城跡)、福井市役所や人絹会館、織物組合といった建物が写されています(写真1~7参照)。撮影された時期は、福井人絹会館(写真1)、福井織物組合(写真2)に星条旗が掲げられていることから、第二次世界大戦後、占領期であることがわかります。では、福井地震の前でしょうか、後でしょうか。

この点は街並みと道路から確かめられます。大名町交差点(写真3)を見ると、路面電車(福井鉄道福武線)



写真1 本町通りと福井人絹会館(福井軍政部司令部) 朝日新聞社提供

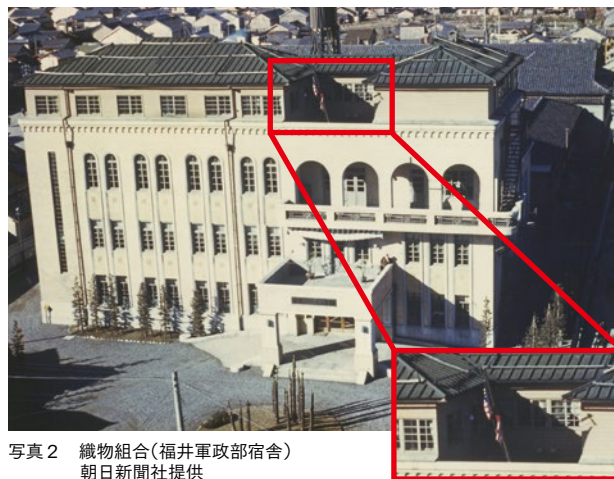


写真2 織物組合(福井軍政部宿舎) 朝日新聞社提供



写真4 福井市役所 朝日新聞社提供



写真5 福井県庁 朝日新聞社提供

の線路が駅前電車通りから南に転じ、幸橋へ向かっています。画面中央の交差点から奥は本町通り(写真1参照)、画面右に見えるのは大名町通りですが、いずれも道幅が狭いまです。この2本の通りは、福井震災後の復興都市計画で道幅を広げられ、とくに大名町通りは周囲の家屋を整理のうえ、北へまっすぐに伸ばされました。昭和26年には福井鉄道福武線が大名町交差点から大名町通りを北進して田原町まで延伸され、交差点にはロータリーが設けられるなど、景観が大きく変わった地点なのです。さらに、ジェームズ・原谷氏は、昭和24年10月に日本を離れており、福井地震後の市街地を撮影する機会を持つことは困難でした。また、昭和22年に撮影された記録写真(参考写真1)や、米軍による航空写真(参考写真2)などとも町並みや街路の状況が一致しました。

こうしたことから、7点のカラー写真は、戦後、福井震災前の市街地を写したものと確認できます。

カラー写真が語る空襲からの復興

では、カラー写真から福市街地の復興のようすを見てみます。戦前からコンクリート造りであった県庁、市役所、人絹会館や織物組合、福井銀行などの建物を除けば、木造の小さな建物が密集していることがわか

ります。空襲で焼け野原になってから2年ほどで、福井は全国でも有数の復興を遂げたとされており、その状況がわかります。また、カラーであることで、家屋の屋根の素材が見てとれます。瓦葺きとともに、板葺きの屋根も多く見られます。福井地震の発生直後、福井市街地では複数の火元から火災が発生して延焼し、被害が拡大しました。板葺きの屋根が延焼の一因として指摘されています。

つぎに、写っている人々やくらしぶりを見てみます。画像が小さいのでわかりづらいですが、自転車、リヤカーなどが行き交い、商店には「牛鳥焼き焼」「アイスクリーム」などの看板が掲げられ、花輪も並んでいます。割烹着姿の女性、子供連れなどの日常生活の一端も生き生きと写し取られています。

まとめ

これらの写真を含め、福井震災前後を捉えたカラー写真を展示しています(9月1日まで)。カラー写真で振り返ることで、度重なる被害と、そこから立ち上がり復興に向かった人々の努力について、より「わがこと」として感じていただければと考えます。

(瓜生由起)



写真3 大名町交差点 朝日新聞社提供



写真6 駅前電車通り 朝日新聞社提供



写真7 駅前電車通り 朝日新聞社提供



参考写真1 本町通りと福井人絹会館 昭和22年ごろ 福井市立郷土歴史博物館蔵



参考写真2
米軍撮影の航空写真
昭和22年10月8日撮影

空中写真データ
UR283CA-17
(国土地理院
<https://mapps.gsi.go.jp>)
をもとに筆者が加工

9月

- 6日(木)
福井県立若狭歴史博物館来館(資料返却)
- 14日(金)
安城市歴史博物館来館(資料貸出)
- 18日(火)
西郷隆盛書簡(福井藩士・村田氏寿宛)県内初公開記者発表(県庁)
- 22日(土)～11月4日(日)
特別展「幕末維新の激動と福井」(特別展示室)
- 22日(土)
福井県立歴史博物館運営協議会(研修室)
- 23日(日)
特別展「幕末維新の激動と福井」展示説明会
- 29日(土)
開館時間延長(19時まで)
- 30日(日)
台風24号の影響により14時にて閉館。

10月

- 1日(月)～12月11日(日)
写真展「石に刻まれた福井の幕末明治」(エントランスギャラリー)
- 6日(土)
開館時間延長(19時まで)
- 7日(日)
特別講演会「幕末維新期の政局と福井」(講堂)
開館時間延長(19時まで)
- 8日(月祝)
開館時間延長(19時まで)
- 13日(土)
開館時間延長(19時まで)
- 14日(日)
ふくい歴博講座「幕末福井の資料をひもとく」(講堂)
開館時間延長(19時まで)
- 20日(土)
キッズミュージアム「幕末先人シルエットでオリジナルの旗&BIG缶バッジを作ろう!」(研修室)
- 21日(日)
移動講座「若狭歴史博物館と若狭の幕末明治」(福井県立若狭歴史博物館、若狭国吉城歴史資料館ほか)
- 22日(月)
「昭和のくらし」コーナー秋の模様替え(トピックゾーン)

11月

- 4日(日)
特別展「幕末維新の激動と福井」展示説明会(特別展示室)
- 15日(木)～16日(金)
福井市明道中学校生職場体験
- 19日(月)
福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館来館(資料返却)
- 21日(水)
福井県立若狭歴史博物館来館(資料返却)
- 26日(月)
高知県立坂本龍馬記念館来館(資料貸出)
- 27日(火)～30日(金)
ふれあい文化子供スクール来館

12月

- 1日(土)
あわら市郷土歴史資料館来館(資料返却)
- 6日(水)
彦根城博物館来館(資料返却)
福井市文化会館来館(打ち合わせ)

- 12日(水)～15日(土)
資料燻蒸(燻蒸室)
- 15日(土)～2月26日(日)
ギャラリー展「ふくい天神伝説をめぐる」(エントランスギャラリー)
- 28日(金)～1月2日(水)
年末年始休館

1月

- 3日(水)～2月26日(日)
企画展「越前萬歳 ～新しい年を言祝ぐ～」(特別展示室)
- 4日(金)
福井県立若狭歴史博物館来館(資料借用)
- 5日(土)
企画展「越前萬歳 ～新しい年を言祝ぐ～」展示説明会(特別展示室)
- 6日(日)
ライブinミュージアム「越前萬歳」(特別展示室)
高知県立坂本龍馬記念館来館(資料返却)
- 19日(土)
ふくい歴博講座「越前萬歳のこと」

2月

- 10日(日)
ライブinミュージアム「越前萬歳」(講堂)
- 16日(日)
企画展「越前萬歳 ～新しい年を言祝ぐ～」展示説明会(特別展示室)
- 28日(土)～5月19日(日)
写真展「写真で巡る福井県指定文化財」(エントランスギャラリー)

3月

- 4日(月)～8日(金)
常設展示更新休館
- 16日(土)
ふくい歴博講座「ふたつの国体」(研修室)
- 20日(水)
福井県立若狭歴史博物館来館(資料返却)
- 25日(月)
福井県立歴史博物館運営協議会(研修室)
栃木県立博物館来館(展示調査)

4月

- 9日(火)
熊本県立美術館来館(資料返却)
- 12日(金)
あわら市郷土歴史資料館来館(資料借用)
- 15日(月)
福井大学語学センター来館(オープン収蔵庫)
- 17日(水)
福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館来館(資料借用)
- 17日(水)～20日(土)
資料燻蒸(燻蒸室)
- 27日(土)～5月26日(日)
企画展「昭和・平成 ふくい観光史」(特別展示室)
- 27日(土)～5月26日(日)
改元記念特別公開「今上皇帝(光格天皇)御即位図」(オープン収蔵庫)
- 27日(土)
企画展「昭和・平成 ふくい観光史」展示説明会(特別展示室)